生田駅前再計画

k00106　宮田　直明

Back Ground Concept

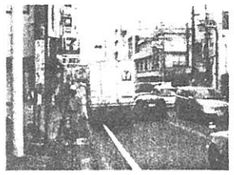
現在東京近郊には「カオ」を失ってしまったまちが数多く存在する。それは戦後の急速な近代化によって推し進められてきた、「量」を重視してきた都市計画の結果である。それによってまちとしてのアイデンティティやコミュニティは失われ、我々にまちの意識を喪失させた。まちとしてのアイデンティティはどのように生まれるのだろうか？それは交流にある。人と人が「カオ」を向けあうことによって、そのまちの「カオ」も生まれる。人の存在なしにはまちは存在しない。コミュニケーションがそのまちをつくる。

本計画は「カオ」のないまちとして地元である生田をとりあげ、生田が本来あるべき要素を活かし、ゆとり・交流の持てるくらしの場としての環境を形成し、まちとして意識できる空間を形成することを目的とする。コミュニケーションを促す装置として、コミュニティ施設がある。これは地域の人に様々なプログラムを与え、コミュニケーションを促進させている。しかしこれによって生み出されるコミュニケーションは使用者に限定され、その結果まちとしての意識は生まれない。このコミュニティ施設に駅前にある「商店街」、生田の自然を生かした「ビオトープ公園」という二つの媒体を混入させることで、自然な形でコミュニケーションが発生し,それはまちの「カオ」をつくりだす。

communication make face

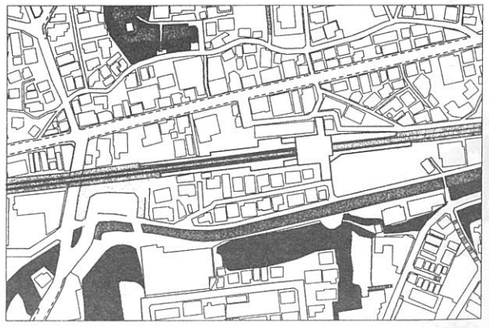
Site

現在、北側駅前を通る津久井道により商店街は分断され、安全快適に買い物をできる空間ではない。また南側も自然を多く残しているにもかかわらず、その景観を壊すようにビルが建ち、川には無機質な護岸工事がなされている。それらをもう一度区画をし直すことで安全な空間を確保するだけでなく、生田本来の形を取り戻す。



Before

Site 1:5000



区画整備

1　津久井道を北にずらす。
2　高低差を利用した車道の高架化
3　切り込まれた山の再生

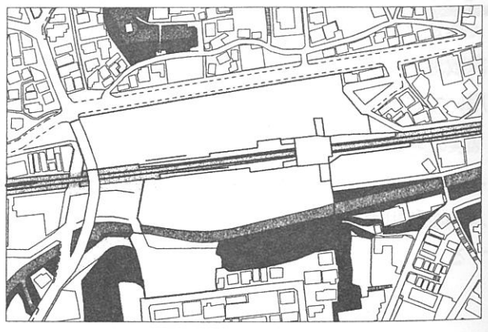
N

New Site

津久井道に分断されていた商店街を北側に、南側には自然の姿を取り戻した景観を活かしたビオトープ公園をつくり、それを結ぶようにコミュニティセンターを配置する。

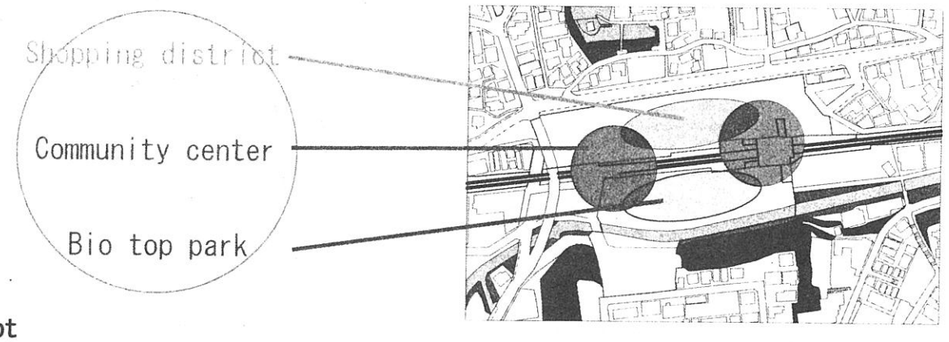
After

Site 1:5000



Zoning

様々なコミュニケーションが発生する仕組みとして、敷地の両端にコミュニティセンターを設け、それらを繋ぐ媒体として、商店街、ビオトープ公園を南北中央に配置する。中央に配置された商店街の中にもコミュニティセンターとしての機能を分散させることでより活発なコミュニケーションが行われる。



Design Concept

Common Design

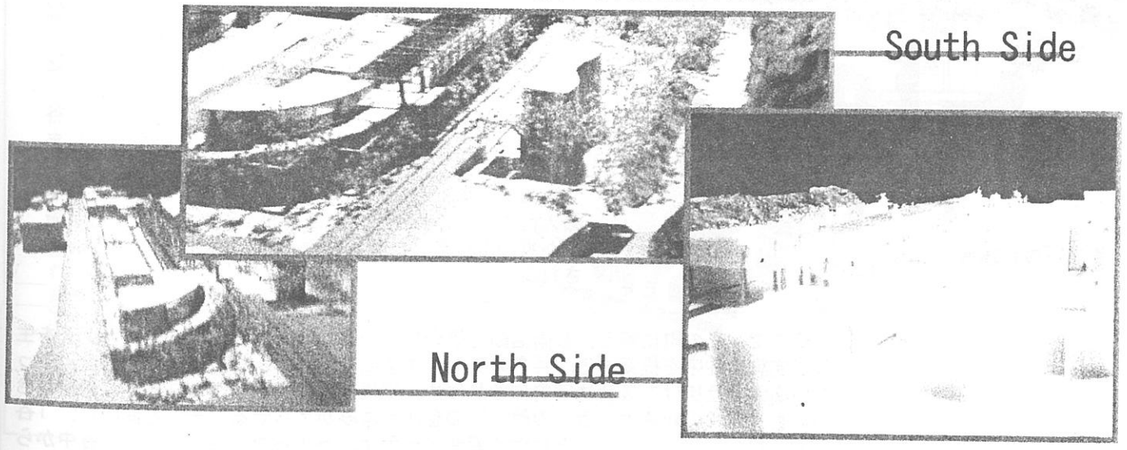
生田の自然は有機的なラインを想像させる。有機的なラインを生み出すものそれは円弧。円弧はその有機的なラインで人を導きいれると共に、様々な動線を自然に結びつける。円弧が繋ぎだす動線によって各機能は結び付けられ、コミュニケーションを生み出す。

North Side Design

敷地は横長でCommon Desighである円弧を結ぶ直線が生まれる。この横長の線にルーバーを用いる。ルーバーが作り出す水平なラインはファサードを生み出すとともに、視線を伸ばしたり住宅側には目隠しにもなる。ルーバーの角度によっては北側にも光を取りいれることができる。

South Side Design

駅や接続通路のある両端はその性質上垂直性が強まってしまう。広場でもあり、駅のホームや北側にも視線を開放するため、垂直性はあるべきではない。そこで接続部にだけ建物を置き、その間は道によって繋いだ。道と建物は、Commonn Desighによって与えられた円弧が向かいの山と対応するようなラインをつくりその二つを繋げている。建物のファサードにはミラーを用い、それは向かいの自然を映し出し風景と同化する。



指導教員　伊藤　洋子 教授